

---

# ひねもす

吉田淑子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひねもす

### 【Nコード】

N2483G

### 【作者名】

吉田淑子

### 【あらすじ】

彼は二つの顔を持っていた。昼と夜とではまるで人格が変わってしまったって、僕は夜の彼を嫌悪しながらも、どこかでひどく魅かれていた。

## 前編

彼は二人いるらしい。昼間はとてもやさしく優秀な先輩。夜は倒錯趣味の変態。彼は昼と夜で、こころを交換しているのだ。

そんな彼は僕が好きだと言う。きみがいちばんかわいいと言う。

「きみは優秀でかしこいね。きみを連れていけると、実に羨ましがられるよ」

「君は僕に似ているから、いっとう好きだ。僕の少年の頃を見ているようだ」

そういう理由で、昼も夜も僕を愛した。しかし、昼間の彼はともかく、夜の彼は当たり前の人間のような普通の友情も愛情も持ち合わせていなかった。持ち合わせているのは虚言癖くらいだった。彼に對する愛情の言葉はすべて虚言だ。性質が悪いのは、その場ではまったくその気になっっているらしい事、誠実に言葉を選んでいるらしい事だ。彼は虚言癖というより、虚気癖とも言いたいような性分だった。

彼は自分に興味を持った人間とは片っ端から付き合いを持つ。ある種の異常な人間というのは、時におそろしく魅力的なものだけれど、彼もその種類の人間で、彼のシンパは枚挙に暇がない。「神戸美智雄は魔法使いだ」そんな噂が流れたのも道理だった。

「彼は宗教家の器だね」と誰かが言った。魅力で言えばそうかもしれない。しかし、彼がなんの野心もないことは僕がよく知っている。彼はとんだ臆病者で、僕が彼によって少しでも傷つくと泣いて謝ったりする。僕が少し意地悪をして、名前を呼んでやらないと、途端に不安げに眉を寄せる。夜も昼もだ。彼は不遇の少年時代を過ごし、他人の傷にも自分の傷にも敏感なようだった。ひどい繊細のこの人が宗教家などというひとかどの詐欺師になどなれるものだろうか。彼と僕は同じボロ家に下宿していたが、一応それなりに仕切りがあった。彼とそこで顔を合わせるのは稀だった。

しかしその日はたまたま、彼の部屋に女が入っていくのを見た。僕は特に感慨もない。まだ昼だ、さては強引に入り込まれたか、と思っただけだ。昼の彼は女性に対して特に臆病でろくに気の利いたことも言えないのだから。しかし優秀で金持ちの男を女は放っておかない。

女か！僕はちつとも悔しくなどないが、なにか腑に落ちない心持ちがしたので、女のじゃまをしてやろうと思った。女の顔もよく見たかった。何も知らないふりでドアをたたく。「美智雄さん。美智雄さん、ちよつとよろしいですか」用はなんて事はない。講義のノートを借りたかっただけだ。いや、それすら本当はいらなのだけだ。

すると、案外すぐに戸が開いた。「きみか。どうしたね」まだ夕方だ。彼はまだ明るい、昼の顔をしている……と思ったが、少し違和感があった。

「今日の講義のノートを借りたいのですけれど」  
「待っていたまえ」

彼は後ろを向いて、学生鞆をあさっているようだった。女は見当たらない。はて、この狭い部屋のどこに女を隠したのかしら。

「美智雄さん」

「はい、今日のぶんすべてだ。きみは先輩のノートまで見て、非常に熱心だね」

「はあ」

なんだか拍子抜けしてしまった。見間違いだっただろうか。

「美智雄さん」

ある事に気付いて、僕は彼を呼んだ。

「なんだい」

「美智雄さん、あなた」

唇に紅をひいている。僕はこれだけのことを言い出せずつつむいた。「きみはへんな子だね」と彼は言った。

僕は部屋に舞い戻った。動悸がする。それこそ、こんなことくらい

で頭全部が心臓に代わったみたいにドクドクいつていた。寝転がって本の続きを読もうとしても、手がふるえてやまない。

なにがこんなにもおそろしいのか？たとえば彼の部屋に入った女は彼自身であったこと、変装が取れ切らず、僕の前に紅をさらしたこと。これ自体は僕は彼の倒錯趣味はよくご存じだから構わない。しかし

僕は古すぎてガタガタ鳴る窓を見上げる。日差しが差し込む。そう、空はまだ明るいじゃないか。まだ夜ではない。彼は、ナルシストの甘えん坊の倒錯癖の彼は、決して昼には現れなかった。

一般に多重人格というものは、別の人格の記憶を擁しないものらしいが、彼はしっかりとお互いの記憶を共有していたから、本来多重人格とは呼べないものなのかもしれない。

彼は夜になると、寂しいのだと言う。抱いてほしいと言う。「僕は母に愛されなかったから、きみにばかりは愛されたい」と、いかにも子供じみて言う。白粉も口紅も厭わない。その様子がいかにもあわれで、本来人間の持つ弱き者を助く心に強く訴えかけるものだから、彼は誰にも著しく庇護されるのだ。

しかし彼の悪いところは、生まれたての赤ん坊のように、その愛される技術を誰にも利用することだった。昼間の彼は、とかげのように人を見れば逃げるような臆病な性質だから、昼も夜も愛されているのは僕だけということになるだろう。

「目の前で血まみれの人がふたり倒れていたんだよ」昼間の彼が、いかにもおそろしいものを見たように呟いた。「確かに覚えている

僕は僕のかわいがる人間二人にたまたま遭遇してしまった。どちらの手を取るんだと言われて　それで、怖くって、僕はどうせなら強い人に庇護されたい。きみたち二人で、強いほうの手を取ると言った。僕は　僕はどうしてこんな事を言ってしまうのかかわらん。自分でも。しかし夜には、こんな傲慢な言葉も、金魚を掬うみたいにヒョイと出てしまうんだね。それで　気付いたら二人が血まみれで倒れていた」彼はだいぶん興奮していて、内容があまり

にとりとめなく続いたので、内容は要約した。

昼間の彼は、夜の自分は鬼であると言っていた。

「夜の僕は変態趣味を持っていて、血を見るのが好きで堪らないんだ。なぜだろうね、夜になるとそう思うんだ。よくよく懐にナイフを忍ばせては、僕を愛する人に自分の喉笛を突けと命令する。

不思議なのは、そんなむちゃくちゃを実行する輩がいることだ。僕はそういつた瞬間俄かにいつもの僕に戻って、おろおろする」

彼は、自分が血を流しているみたいに青ざめていた。

「だからきみ、大切なきみにだけは特に言っておこう。僕が何を言っても、きみはきみを傷つけてはいけないよ」

「美智雄さんは僕には優しいでしょう。昼も夜も」

「そうとも。僕はきみには優しくしている。しかしね　夜の僕はわからない。なんでもいいんだ。きつと。僕を深く深く愛してくれらるならなんだって誰だって。それにね」

彼はいよいよ疲れたように息を吐いた。

「夜は僕を侵蝕している。確実に僕が僕でいる時間が短くなっている」

その時、彼の声が別人に聞こえてゾツとする。彼は不意に僕を抱きしめた。腕がふるえている。

「どうか僕を哀れと思うなら、言う事を聞いておくれね。きつとだ」彼のふるえる声をまったく目の前で聞いて、いよいよ僕もおそろしくなった。僕は夜の彼も刺激的で嫌いではないが、彼はたやすく他人の生を破壊する。彼が怖がるのもよくわかる。彼は、彼自身すらもいずれ破壊するだろう。

「美智雄さん、安心してください。僕は昼のあなたの味方ですよ。

あなたの言う事を聞きますよ」

僕はそう言った。

しかし、僕は昼間見たあの唇の紅が忘れられないのだった。今はまだ明るい、ここにいる美智雄さんは、はたしてどちらなのかしら



## 後編

僕が勝手に彼の母親だろうなと思い込んでいた写真は、やはり彼の母親だった。

「どうしてわかったんだい」

「だって、そっくりですもの」

僕はその写真を手に取った。明らかに仕立ての良い着物、上品な佇まい。髪の色まで彼にそっくりだった。

「その写真ね、僕は大嫌いで、でもなぜか捨てられずに押し入れに深くしまっていたのだけれど、夜の僕が決まって取り出すんだ」

「へえ……」

僕はその写真をしげしげと眺めた。えんぜんと微笑む母親に比べると、手を繋いで一緒に写っている幼い彼は青白い、こわばった顔をしている。

「笑えと言われたが、ちつとも笑えなかった。おまえは笑顔すら作れないのか、と母親にずいぶんなじられた」

「そんなに強く当たれば子供が怯えるのは当然でしょうに」

「そうだね。僕もそう思う。けれども、当時の僕はひどく気に病んだものだ。こんな簡単なことも出来ないのだから、いったい僕は当たり前の人間ではないのではないかとね」

写真を見ながら僕は思った。夜の彼が自分に似た人間を愛するのは、彼がナルシストであるからではなく、自分に似た母の面影を求めているからではないか。彼が女装を好むのは、母により近くありたいからではないか。写真の中の青白い彼は何も言わない。

「宮野くん、もういいね。しまうから返してくれ」

僕はずいぶんぼんやりしていたらしく、彼に声を掛けられるまで写

真を見つめ続けて憚らなかつた。

「あ、すみません」

「さて、日が沈む……」

彼は悲しそうだった。夕陽の赤い光が窓から差し込んで、彼の白い頬を照らした。僕は思う。たとえばこの昼と夜が混沌とした夕闇では、彼はどんな心持ちなのだろう。

「美智雄さん」

と、呼んだ。振り向いた彼ははじめぼんやりとしていたが、そのうち目が狂気の色に爛々と輝いていった。それは太陽の明るさと反比例するようだった。外国では気狂いのことを『ルナティック』と月に喩えて言うそうだが、彼もその『ルナティック』であるのかもしれない。

「外に出る」

彼はおもむろに立ち上がりそう言った。

「どこへ行くんです」

「きみには関係がない」

彼は身に着けていたシャツとズボンを脱ぎ去り、女物の簡単な着物を着て鏡に向かった。唇に紅をさす仕草は女以上に女らしい。

「それとも、きみも行く？ おそろしい繁華街へ」

彼は鏡に向かったままだ。

「いいえ……」

「きみはまるで生真面目な中学生だな。きみは僕がきらい？」

僕は首を振った。それは鏡越しに彼にも見えていることだろう。

「では行こう、行こう。僕はね、きみのような小姓を連れて歩きたいと思っていたんだ」

彼はいとも簡単に僕の腕を掴み、まずなじみらしい酒場に案内した。彼は僕を男女様々の仲間に紹介したあと、狭い酒場のほうぼう巡って適当に目をつけた誰かの手を握ったり挙げ句口づけまでしてみせた。僕が他の連中から同じように絡まれるとすかさず、

「彼は僕の色小姓だから、きみたちは触っちゃいけない」

と言った。連中は彼の言う事はよく聞くようだった。彼の前に置かれたウイスキーの量はどんどん減っている。人格が違つとはいえ体質は同じだろう。彼は確か酒には強くないはずだが　心配は的中して、彼はとうとうひっくり返ってしまった。

「美智雄さん」

僕が呼んでもいらいがない。代わりに酒臭い息で僕に口づけた。そしてにやりと笑った　僕は写真の彼の母親を思い出した。あの母親もきつと、こんなふうに媚びたように笑うだろう。

彼のその笑顔を合図に、どうやら乱交が始まった。僕はまるでシヨウを見るように部外者の顔でそれを眺めていた。初めて見た万華鏡よりもパノラマよりもそれは僕には感動的だった。彼の脚がふと増えて、それは誰か知らない人間の脚だと知る。狭い酒場のほうぼうにいろんな類いの変態がいたけれど、僕はさすがに美智雄さんばかりを見ていた。昼には不健康な肌色は夜には輝いて見えた。僕はそれを見るにつけ、だんだん夜の彼こそが真実の美智雄さんなのではないかしらと思ひ始めた。彼に似合うのは、昼間の眩しい光ではなく、夜の淡い光ではないか。もつと言え、この人工の味気ない電球の光ではないか。

翌日、美智雄さんが朝から青い顔をして大学に行くのを見た。

「美智雄さん、平気なんですか、からだは」  
声を掛けると、彼は恥ずかしそうに早口で、

「別になんともない」

と言った。僕の目をまともに見れないらしい彼の蒼白な面は、僕の密かな加虐心を満たした。

それから僕は昼間に彼と会うことは滅多になくなった。代わりに夜の彼はしょつちゅう僕を連れて夜の繁華街へ出かける。酒場、ダンスホール、シヨープ、どこにだって彼の知り合いはいた。僕は少年らしい無邪気さで彼を慕った。大人の遊びを知っている彼が、とてもとても大人に見えたのだ。彼は相変わらずときどき他人の血

を見ては、もつとやれ！とはやし立てるような残虐だったけれど、僕には優しかった。僕は彼がたまらなく好きになってしまった。

ところがある日、彼がいなくなつた。彼なしで娯樂の満たされないようになつていた僕は居ても立つてもいられず、彼の部屋を訪ねた。まだ明るい、構うもんか。主は現れなかつたが戸は不用心にも開いたので中に入る。すると、僕宛てにと名前が書いた手紙を見つけた。以下内容。

『僕はどうかやら気違いなので、自分で脳病院に入ることにする。あそこならば夜の彼もどうしようもないだろう。きみともこれを機に縁を切る。よしなに。美智雄』

少し神経質そうな細い右上がりの文字がときどきふるえていた。脳病院！あのおそろしいキチガイばかり寄せ集めた牢獄！彼とてそんなところはおそろしいに決まっている。しかし彼には、それ以上に夜の彼がおそろしかつたのだ。

僕は怒りに青ざめた。彼を、美智雄さんを、夜の彼をキチガイ扱いして奪つていった彼が許せなかつた。彼は人より少し愛に飢えているだけだ。僕は短刀ひとつを懐に入れ、タクシーを止め、もっとも近い脳病院へと向かつた。ものものしい看板が見えて、どうやらたどり着いたようだった。昼だというのにひどく暗い。獣のような声は、たぶん人間のものだ。

「神戸美智雄に面会を」

灰色の顔の看護婦に告げた。彼女は何も言わず、黙って紙を差し出した。三〇五号室　神戸という名字はあまり聞かないから同名ではないだろう。彼がいる！

「ありがとう」

三〇五号室はずいぶん遠くに思えた。みちみち、様々の狂気をはらんだ瞳にぶつかった気がした。空気さえ重苦しく、患者の思考にならない思考というものに支配されていた。一步、二歩。三〇三、三〇四……

三〇五号室。

檻に閉じ込められた彼はこちらに気付いていない。狂人の部屋に閉じ込められているくせに、相変わらず聖人のように理知的な、ま白い顔をして本を読んでいた。牢屋の中のジャン・ヴァルジャンも最初はこんな顔をしていたに違いない。僕はそれをしばらく眺めてから、声を掛けた。彼が驚いて顔を上げる。

「きみは……」

「会いにきましたよ、あなたに」

「僕はきみとは縁を切ると書いたはずだね」

彼は本を閉じて、一度見たきり僕の方を見ようとせず、ずっとまっすぐ前を見据えていた。まだ明るい。昼間の彼だ。

「美智雄さん、僕は短刀を持っているんですよ」

「僕を殺すつもりか。いいだろう」

彼は立ち上がり、格子の間から手を出した。

「切り落とされても構わない」

僕は頷き、短刀を彼の腕に当てたが、それはポーズでしかなかった。僕はすぐに自分の首に短刀を当て、喉をまっすぐ突いた。

『きみだけはきみを傷つけてはいけないよ……』

彼の声を覚えている。約束を破って、こうやって自分を傷つけるのがいちばん彼には効くと思ったのだ。案の定彼は檻の中でひどく狼狽した様子だった。せいぜい嘆くと良い。あなたは人を傷つけることとしかしないのだと思い知ると良い。

そして僕はどうか助かり、彼は悲嘆に暮れて自殺してしまった。

悲嘆に暮れたのだから死んだのは昼の彼だろう。

彼の最期　女の着物にきちんと化粧をして血まみれになっている姿　それは夜の彼そのものだった。その血だまりの中に、彼の母親の写真があり、彼が最後までそれを眺めていたと知れた。「きつと次はかわいい子供に生まれて、母に愛され、正しく日本男児として生きたい」いつか夜の彼がそう言っていたことを思い出す。昼の彼の憂いを帯びた瞳も。

昼も夜も　彼は愛に飢えていたのだ。僕は気付かなかった。ひね  
もす彼は同じ人間であった。美智雄さんにはもう会えない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2483g/>

---

ひねもす

2010年11月28日06時39分発行